慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岩波書店編 岩波哲学辞典
Sub Title	
Author	勝本, 鼎一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.1 (1923. 1) ,p.155- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の能率定型は著しき差異なきを見る。

以上は正味勞働時間を九時間とせる場合の能率曲線の定型なるが、さらに勞働時間を一時間だけ午後に於て增加し、午前を四時間半、午後を五時間半とし、就業時間の配置を變更するときは、前の定型は著しき變化を生じ、前には午後の休憩後は一日中の最高を示せるに拘らず著しく下降し、一日中の最高率は午前の休憩後に移さる。而して是等の能率曲線の異動に就き特に注意を要するは定時間の最終に一時間だけ勞働時間が增されたる爲め、午後の休憩後の能率も午前の休憩後の能率も共に低下し、殊に九時間目よりの低下は急速度を示せること及び一日中の能率波動の高低差は勞働時間一時間の延長によりて增大の傾向を示し、一日一時間當出來高は、勞働時間一時間の增加によりて著しく低下するのである。

是等の實驗に徵するときは、女にありては正味勞働十時間以上なるは、如何なる輕易の作業にても過長の嫌あり、數ヶ月に亘りて繼續するときは遂には疲勞の影響を受け、時間增加は一日中の出來高を增加する所以とならず、却つて週刻者缺勤者を多くし、總生產高を減少する所以となる。然からば正味勞働時間は、多分の女工に對しては八時間を適當とするか、九時間を可とするかは、その作業の種類に因り、通勤と寄宿との差もあり、さらに訓練の良否にも關し、一概に斷定を下すを得ざるも、

（中略）一般工場に於ては相當訓練を經たる男工に對しては正味勞働九時間位、同じく訓練を經たる女工に對しては正味勞働八時間位とし、前に述ぶる如く休憩時間は正午四十分乃至一時間、午前午後の休憩時間は各十分乃至十五分とすることが、多分の作業に於ては先づ相當なるを見る。

以上述ぶる所は一日中の各時間に於ける勞働能率の波動を示せるものなるが、能率は一週間の各日に於ても同樣の曲線を作る。一日九時間勞働六日間就業、日曜休日の場合に於ては第一日即ち休日の翌日が一週中の最低能率を示し、日を經るに從ひ上進し、四日目又は五日目に一週中の最高率に達し、それより降つて六日目の最終日に及ぶことは、先づ本邦に於ける手工作業（男女）の能率の定型と見らる。然るに若しも七日或は八日と就業日を繼續するときは、その最高に達するは概ね五日目であるが、六日目よりの能率下降の度合が強きを加ふることは、恰も前の勞働時間增加の場合に、八時間乃至九時間目の能率下降度合の強きと相似たるものがある。それ故勞働時間が漸く濃化せられつゝある我國多分の工場にては、每月二回乃至三回の休日にては少きに過ぐるの感がある。矢張り一週一回の日曜に正確に休日とすることは如何なる作業にても、亦た男女を問はず相當なりと思はる。

斯くの如き結論は決して奇異とするに足りない。然しながら氏に於いては、結論は奇異なるが故に貴しとするにあらで、寧ろ平凡なる結論に到達する各般の實際的經驗調査を尊ぶべきではあるまいか。以上は單に一二の例を示したに過ぎない。これと同樣に價値多き文字は、本書の前後十章、勞働能率、作業形態、勞働類別、勞働移動、勞働時間、勞働選擇、勞働訓練、勞働衛生、勞働厚生、勞働報酬の全篇各所に於いてこれを見出すことが出來る。

本書はもと專賣創始二十五年を記念せんがために本年二月稿を起されし由であるが、洵に好個の出版であつて、氏の力に俟つにあらざれば、何日に至るもかくの如き好記念物は完成せられ難いであらう。寡聞敢て稍長き引照を試みたるは、學界のためにその公刊を慶賀し、併せて汎く工業實務家並びに工業政策研究者に勸めむとする微意に出づる。

園　乾　治

岩波哲學辭典

四六倍判一二〇四頁
定價金拾八圓
岩波書店發行

洵に福田博士の言はれし如く「凡そ一科の學を修むるに必ず欲しきものは善き辭典と善き雜誌と善き全集となり。」其の殆ど凡てが思索に負ふ哲學の領域にありても尙ほ紀平博士と共にアイスラーの「二種の哲學辭典は我等の座右を離すことの出來ない書物である」ことを告白せざるを得ないであらう。同文館が曾て「大日本百科辭書」の一つとして「經濟大辭書」其の他と共に「哲學大辭書」を公にして以來既に十年の歲月を閱した。其の間、學問の進歩は哲學の領域にありても亦著しき變化の跡を認めしむるものがある。今や幾多の新學語は舊き辭書をして其の欠陷を暴露せしめつゝある。舊辭書に根本的補訂の施されざる限り新書の出づべきは當然である。岩波書店則ち茲に顧る所あり、宮本和吉、

高橋穫、上野直昭、小熊虎之助諸氏編輯の下に今回公にしたるが茲處に紹介せんとする哲學辭典である。收むる所、純粋哲學を首めとし認識論、哲學史、論理學、心理學、美學、社會學、法理學、經濟學（但し此の科、凡例に掲げられ居るも和洋索引中にも本文中にも、經濟學なる項を見出し得ざるは遺憾である）其の他十二科。執筆擔當者は多く當代の一流の學者を網羅せる點に於て先づ我等の信頼を拂はしむるに十分なるものあるであらう。

凡そ學術辭典の生命とする所は、單に一定の知識を與ふるに止まらずして――是れ寧ろ第二義的である――更に進んだ研究に對する指針となるにあらねばならない。而かも限られたる紙面に凡ゆる學説、事項を網羅することは到底不可能にして其の間自ら精粗繁簡の生ずるは蓋し止むを得ざるに出づるものである。唯だ此の場合よく一の點あつて开を充せるものあらば恐らく餘の諸點にして欠陷を有せる場合ありとするも尚ほ容易に恕せらるべきものであらう。开は即ち文獻を可及的豐富に收載すること是れである。一の問題に就いて其の悉くを擧ぐるは不可能なるにしても、少くとも主たるものは以てせらるべきである。若し夫れ個々の學者を説ける條下にありては、縱し其の學説に就いて記する所なしとするも、若くは簡粗に過ぐるとするも（例へば「ヘルマン、コーエン」の條下參照）希くば其の著作は系統的に可及的に多くを擧ぐるを以て當然の任なりとして貰ひたい。全集のあるものあらば其れが一二權威を擧ぐることに依つて餘りの繁雜は避け得らるゝであらう。斯くて縱令學説に就いて詳しく、敎へらるゝ所なしとするも更に進んでする研究の手引たり得るは言ふ迄もない。個々學者に關する既出の研究成果に關しても亦同樣のことが言はれる。此の意味に於て一例としてリッケルト、ヴインデルバンドの條下其の著作を擧ぐる餘りに省略を用ひたると、カントを説ける條下參考書として一グーノーフイッシャー、一フアイヒンゲルの名をすら見出し得ざるを憾む。

乍併、如上の諸點に遺憾なからんと欲せば、本書は膨脹して恐らくはアイスラーの夫れの如く「諸概念の辭典」と「學者人名辭典」とに分冊せざるべからざるに至り本書の當初の企圖の範圍外に逸するであらう。從つて本書を以て、恐らく其の目的としたる一のハンドレキジコンとして見るならば凡ては白玉の微瑕として許さるべきは勿論、其の容積の比較的小なるに對し項目の豐富なると殊に執筆者に其の人を得たるものある點に於て十分推奬するに足る資格を具ふるものであると言へると思ふ。唯だ我等經濟學徒の一人として一言を許さるゝならば、本書がアップ、ツー、デートたるものなるに拘らず、而して當然哲學の領域に於て語らるべきものなるに拘らず既に樹立の域に達せる「經濟哲學」に就いて將た又「法律哲學」に就いて何等與へらるゝ所なきは衷心の遺憾として他日補訂の日あるを切望するの念に堪へざるものである。（彼のシュタムラーの如きに就いてさへ纔かに「新カント派」に關説して二行足らずを割けるのみ）

勝本鼎一